



モクタリ 明子（言語学）

この時代に外国語を学ぶ意義

最近、「オンラインゲームをするときに、海外のゲーマーと英語で話しています」という学生さんがちらほらいます。その際に耳にした authentic な英語の意味を尋ねてきたり、果敢に自分でも使ってみたりする姿を見て、私の学生時代には想像もつかなかった方法で英語に触れられるようになったものだと感心します。一方で、AI 翻訳などを用いると一瞬にして自分が言いたいことを英語に変換できる現代において、「英語を学習する意義が見出せない/英語学習はもはや必要ない」と感じている人もたくさんいると思います。日本でも海外でも、旅行者がスマホの翻訳アプリを見せ合いながらコミュニケーションをとる姿を見かけるようになりました。この先、英語教育がどうなっていくのか？必要とされない時代がやってくるのか？それは、英語教員である私にも分かりません。しかしそれでも、特に若い学生さんには英語（そして他の外国語も）を学んでほしいと強く思う理由があります。

「もう 1 つの言語を持つということは、もう 1 つの魂を持つということだ」というのは、初代神聖ローマ皇帝であるカール大帝のことばだと言われています。外国語の学習を続けていると、ある時点から、「その言語を学習する」というフェーズから、「その言語で学習する」というフェーズに入ります。そうなれば、こっちのものです。自分が興味のあることについて、学習言語で読む・聞く・見る・話す、としていると、どんどんその言語に親しんでいけます。単語帳で丸暗記した単語の意味がストンと腑に落ちたり、これまでクスリとも笑えなかった海外ジョークの面白さが分かったり、聞き取れることばと全く違う字幕がついていた映画のシーンの意味が理解できたり、なんてことが起こり始めます。これがさらに先に進むと、パーっと目の前が開けたかのように、その言語共同体に属する人たちの独特な（と、私たちが感じるだけですが）考え方が理解できるようになります。まるでハリー・ポッターが魔法の世界の存在を認知していく過程のように、私自身も英語を学習していく中で「もう 1 つの世界があったんだ！」と感じたことを覚えています。そして徐々に日本語を介さずに英語を発することができるようになってきました。すると、日本語で話す自分と、英語で話す自分が、何だか違う人間であるように感じるということが起こり始めました。心理言語学者のビオリカ・マリアンは、自著の上述のカール大帝のことばをタイトルにした章*の中で、関連研究をあげながら、マルチリンガルは使用言語によって違う自分が現れることが多い、と述べています。

自分の中に、日本語の世界と英語の世界があること—あるいは 2 人の自分がいること—は、人生を面白くしてくれるし、日々の中で閉塞感を感じたり行き詰ったりしたときに大きな助けにもなってくれます。これから先、あといくつの言語を学び、いくつの世界を味わえるのか、考えると楽しみになってきます。

*ビオリカ・マリアン 著、今井むつみ 監訳・解説、桜田直美 訳『言語の力』

「第 I 部 6. もうひとつの言語、もうひとつの魂」(KADOKAWA、2023)